

日本のクリスマスの歴史

戦国時代に始まったクリスマス



2 千年ほど前のイエス・キリストの誕生以来、クリスマスは世界の様々な国で祝われていますが、日本ではいつ頃から始まったのでしょうか。

日本に初めてキリスト教が伝えられたのは、1549年、ポルトガル国王の援助でやって来たスペイン人宣教師フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸した時です。ザビエルはその前、東南アジアのマラッカで布教活動をしていました。その時、人を殺したためポルトガル船に隠れて日本を逃げ出しマラッカに来ていた弥次郎という武士に出会いました。弥次郎はザビエルの話を聞いてクリスチャンになり、当時中国伝道を計画していたザビエルに、「ぜひ日本にも来て、戦いで負傷した武士や、苦境にあえぐ農民をイエスの教えで救ってほしい」と頼んだのでした。当時の日本は戦国時代で、室町幕府には国を統治する力がなかったため、各地の大名たちは権力争いにあけくれています。

そこでザビエルは、弥次郎を案内係として日本にやって来て2年ほど布教しました。その後、他の宣教師たちも日本に来るようになり、各地で信者が増え、教会が建てられました。その頃台頭した織田信長は、キリスト教を公認し、宣

教師を手厚く保護したため、信徒は100万（当時の人口の30%）を越したと伝えられています。そして、高山右近、大友宗麟、大村純忠、有馬晴信のような、有名なキリシタン大名が現れたのでした。しかし、豊臣秀吉が迫害政策に転じ、キリシタン禁止令が發布され弾圧が始まると、その発展は妨げられ、明治の開国によってキリシタン禁制が解かれるまで、信教の自由はありませんでした。

さて、このような歴史の中でクリスマスはどのように行われてきたのでしょうか？ ザビエルは、日本で初めてのクリスマスを祝ったと思われますが、正式な記録として残っているのは、ザビエル来日数年後の1552年、現在の山口県周防の教会で宣教師たちが日本人信徒を招いてミサ（クリスマスは、「キリストのミサ」の意）を行ったというものです。1560年代になると、京都では、クリスマスに沢山の信者たちが集まり、キリストの誕生を祝うだけでなく、戦いに負傷した者や貧民の救済活動を組織し、貧しい人たちのために寄金を募り、食事を提供し、飢饉の際には炊き出しなどを行ったと記録されています。その頃は戦国時代でしたが、キリストの愛と平和の教えが広まるにつれ、それは人々の考え方や決断に大きな影響を与えていきました。

そんな1568年のクリスマスのこと。大阪の境の近くで織田信長の軍と松永久秀らが陣を張ってにらみ合いを続けていたのですが、どちらの軍にもクリスチャン信者が大勢おり、彼らは敵同士として戦うことで辛い思いをしていました。そこで、ポルトガルの宣教師が両軍にクリスマス休戦を嘆願し、何とクリスマス・イブには、敵味方関係なく70人も武士が共にクリスマスの礼拝をしたのでした。

さて1580年代になると、信長の保護を得て教会はますます大きくなり、京都に南蛮寺と呼ばれ

る3階建ての聖堂を建て、盛大なミサを挙げるようになりました。南蛮寺は、京の新名所として賑わい、門前には南蛮帽やロザリオなどの南蛮グッズを売る店も現れ、教会ではオルガンの伴奏で賛美歌が歌われ、織田信長もよく訪問しては、オルガンやハーブ、フルーツなどの音色に酔いしれたと言われています。しかし、時代が変わってキリシタン禁止令が発せられると、公にはクリスマスは祝われなくなり、キリシタンたちは密かに礼拝をするだけとなりました。

そして、200年余り続いた鎖国が解かれ、明治6年にキリシタン放還令が出ると、再びクリスマスが祝われるようになりました。その頃から、クリスマスパーティーにサンタクロースが登場したり、クリスマス用品が店頭に並ぶようになり、明治37年には銀座「明治屋」に商業ディスプレイとして初のクリスマスツリーが登場して話題になるなど、「クリスマス商戦」が始まったのです。

大正時代には、子供向けの本や雑誌にクリスマスにまつわる話が紹介されるようになり、大正14年、日本で初めてのクリスマス・シール（結核撲滅の寄付切手）が発行されました。昭和3年の朝日新聞には「クリスマスは今や日本の年中行事となり、サンタクロースは立派に日本の子供のものに」と書かれるまでになりました。その頃、「三越」のイルミネーションとクリスマス大売出しが始まり、銀座、渋谷道玄坂から浅草にいたるまでの多くのカフェや喫茶店では、クリスマス料理がメニューに入り、店員はサンタの服を着て客を迎えたそうです。

第二次世界大戦によって「クリスマス商戦」は一時中断されましたが、物資が乏しかった戦後には、GHQ（連合軍）の日本復興支援として、サンタの格好をした人がお菓子を配るとか、パラシュートで空から舞い降りてくるなどのイベントを開催して人々に笑顔を与えました。それによって、クリスマスは「愛を贈る日」としても広がっていったのです。その後、「ホワイト・クリスマス」のような映画が上映され、景気復興でクリスマス・セールが復活すると、一般家庭にもプレゼント交換やケーキやチキンを食べるという習慣が普及しました。

ここで、クリスマスと経済についての興味深い報告があります。2005年末に第一生命経済研究所が試算した「クリスマス

の生産波及効果」によると、その額は約1兆1千億円になるということです。試算方法は、クリスマスプレゼントの出費に関するアンケート（2002年）から贈り物の直接金額を出し、各種産業への波及率を掛けるというものです。成人男女約1億人の半分が何らかのクリスマスプレゼントを購入し、その平均金額は男性1.8万円、女性1.2万円でした。それに加えて、プレゼント額の約1.5倍が、クリスマスの食事や旅行、イベントなどの付随生産として生み出され、それらの総計売上げが1兆1千億円だったそうです。ちなみにバレンタインデーの経済効果は約500億円、ワールドカップは700億円だそうで、試算が正しければ、圧倒的にクリスマスが勝っています。

このように開国後のクリスマスは、信仰を伴うものではなく商業ベースによる広がりが多かったため、残念なことに、クリスマスの意味も知らぬまま、ただの行事として定着してしまっただけのケースが多いようです。

あらゆる知識があっても、神を知らない者は不幸だ。
何も知らなくても、神を知っている者は幸せ者だ。
-- 聖アウグスティヌス

神の愛は、舌やペンでは語れないほど大きい！ それは、一番高い星を超え、また一番低い地獄へさえも行く！ 神の愛は、すべてのものに対する答である。それは、魂を救い、罪をゆるし、心を満足させ、思いを清め、身体をいやし、友人を勝ち取り、人生を生き甲斐あるものにしてくれる。

-- デービッド・B・バーグ